

TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazin

vol. 93

突き抜ける力

企業人事・卒業生に聞く
富士フイルム／トヨタ自動車／神戸市役所





「第18回岡本太郎現代芸術賞」特別賞を受賞した「神宮寺宮型八棟造」 写真提供：川崎市岡本太郎美術館

突き抜ける力

アワードの受賞やグローバルなトップ企業とのコラボなど、作家やクリエイターとして突き抜ける力を身に付け活躍している卒業生たちは、どのようにして自分の表現を確立していったのでしょうか。学生時代のこと、手ごたえを感じたきっかけ、チャンスを感じたとき、自分のスタイルを手に入れるための努力など、活躍する6名の卒業生に話を聞きました。

アーティスト | 11年彫刻卒業

江頭誠 EGASHIRA Makoto



1986年生まれ。三重県出身。2011年に多摩美術大学美術学部彫刻学科を卒業。戦後日本で独自に生産され、高度経済成長期の一般家庭に普及した花柄の毛布を素材に用いて、大型の立体作品や空間性を活かしたインスタレーション作品を制作。2015年に第18回岡本太郎現代芸術賞展で特別賞、翌年にSICF17でグランプリを受賞。

「岡本太郎現代芸術賞特別賞」受賞、GUCCIのショートフィルムに起用

卒業制作で初めて取り入れた花柄毛布で SICF17でグランプリを受賞

母が持たせてくれた毛布を
友人に「ダサイ」といわれ覚醒

初めて毛布を作品に取り入れたのは卒業制作です。他の人と同じことをしたくなかった私は彫刻の基礎となる木や石、粘土とは違う形が限定されない素材に興味を持っていました。サラリーマンである父親に「最近の作品

は上手いけど、らしさがなくなった」と言われ、コントロールできない偶然性の立体を模索していたころです。そこで思い出したのが、友人が僕のアパートに来たときに発した「ダサイ」のひと言でした。上京時に母親が持たせてくれた花柄毛布を笑われたのです。一度指摘されたら、それまで部屋になじんでいたはずの毛布が派手で異質に見えて仕方ない。それがずっと胸にストックされていたので、

左：江頭さんの卒業制作「大阪冬の陣」、右：「SICF17」グランプリを受賞した「お花畑」



作品にしてみようと思いつき、1か月くらいで制作しました。花柄毛布をミシンで縫って、綿を詰めて、お城の形に仕上げた作品です。

ただ、作品を卒業制作として発表しても反響は特にありませんでした。それで、一度作品制作はあきらめ、履歴書の自己PR欄に「一生働きたいです」と書いて、家具店に就職します。家具のカスタマイズは彫刻学科の経験にも似ていて、楽しい仕事でした。人間関係に恵まれ、同僚とクリエイティブな話ばかりをしていたように思います。

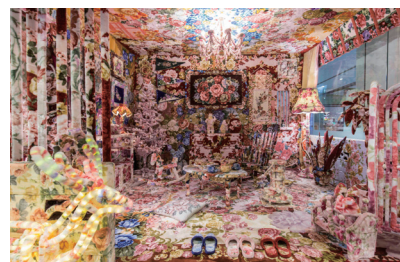
作品制作を再開したのは、同僚との会話がきっかけでした。初めて披露したつもりアイデアに対して、「これで聞くのは5回目。そんなに言うなら自分でやったほうがいい」と背中を押されたんです。それが発泡スチロールで制作した霊柩車を花柄毛布で覆う作品で、サイズ制限のなかった岡本太郎現代芸術賞に申し込み、特別賞を受賞できました。

5年ぐらい花柄毛布で制作し 続ければ代名詞になると言われる

受賞をきっかけに独立しましたが、ギャラリーの展示などのオファーはありませんでした。彫刻学科で教わっていた黒川晃彦先生に相談したところ、「作品ひとつを発表したくらいで何を言っている。5年くらい花柄毛布で作品を制作し続ければ、そのうち代名詞になる」とアドバイスをいただき、新作の制作機会を模索するようになりました。

そうして申し込んだのが、若手作家に向けた公募展形式のアートフェスティバルであるSICF17です。空間的な制約から逆算し、コンパクトなブース全体を洋室トイレの個室に見立てて、発泡スチロールで形作った便座など空間すべてを花柄毛布で覆いました。結果的にグランプリを受賞し、展示やコラボレーションの依頼が途切れないようになりました。

私がアーティストが続けられているのは、いろんなところに自分の居場所を持っていたからです。人間関係だけでなく、今も非常勤講師や絵画教室をやっているように、仕事環境という面でも同じです。退路を断つという潔く聞こえるけれど、すべてを一本化してしまうと、かえって作品の純度が損なわれることもあるでしょう。人によっては自分に偶然性の余地を残しておくことが、転機を乗り越えていくうえで大切なように思います。



スパイラルにて開催された個展「Rose Blanket Collection' 16」



静岡県島田市と川根本町で開催された「UNMANNED 無人駅の芸術祭」にて、地元の方に作品を身にまட்டுもらった「間にあるもの」



江頭さんの作品が使用されたグッチのショートフィルム「KAGUYA by GUCCI」(2022)



なぜグローバルなトップ・ブランドは、アートに注目するのか？

グローバルな飛躍が期待できるアーティストに 自由な創作と国際交流の機会を提供したい

メルセデス・ベンツ日本株式会社 マーケティング / O2O推進部部長 長谷川孝平

グローバル企業の社会的責任として 文化芸術支援活動を推進

メルセデス・ベンツは、グローバル企業として環境や文化、教育など、幅広いCSR活動を実施してきました。文化芸術支援としてアーティストをサポートしてきたのも、その一環です。本国ドイツでは「メルセデス・ベンツ アート コレクション」を1977年に設立。ヨーロッパで最も重要な企業コレクションに数えられ、国際的な評価を得ています。日本でも30年以上に渡り、アーティストに滞在制作や展示会の機会を提供してきました。

現在も芸術・文化のさらなる発展に寄与するため、「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」を通じて、現代美術の有望な若手アーティストの育成と国際交流を促進しています。滞在先でのリサー

チをベースとしたアーティスト・イン・レジデンスの形をとっているのは、アーティストの方々の人脈形成や文化理解を後押しするためです。この経験がアーティストにとってキャリアの糧となってグローバルな飛躍につながり、アートを軸とした国際交流が広がっていくことを期待しています。

常に自由な発想で創作し 世界に挑戦してほしい

「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」の参加者にはプログラム参加後、フランスのパレ・ド・トーキョー、スイスのティンゲリー美術館といったヨーロッパの名だたる美術館で開催した泉太郎さん(多摩美術大学大学院美術研究科 修士課程修了)をはじめ、世界で活躍されるアーティストが大勢いらっしゃいます。

また、多摩美術大学と連携協力を結び、学生とアーティストの交流も推進しています。グローバルに活躍しているアーティストが、どのような着眼点やアイデアで活動しているのか。どのようにリサーチを進め、作品を制作しているのか。さまざまなノウハウを次世代のアーティストに活かしていただきたいと思います。

アーティストには常に自由な発想からなる創作活動を期待しています。オープンマインドで開かれた活動をし、現代アートが今よりもっと親しみやすいものになればうれしいです。もちろん、ヨーロッパ発のグローバル企業として、これからも世界に目を向けてチャレンジしていくようなアーティストを応援したいとも思っています。

「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」の情報はこちら





左:「all same brain」(撮影:山中慎太郎(Qsyum!))、中2点:川内さんの卒業制作「qualia man」と「qualia woman」、右上:「shiseido art egg賞」受賞時の個展「SHISEIDO Art Egg vol.9: Go down the throat」(撮影:加藤健)、右下:寺田倉庫にて開催された「TERRADA ART AWARD 2021 ファイナリスト展」(撮影:山中慎太郎(Qsyum!))

アーティスト | 15年油画卒業

川内理香子 KAWAUCHI Rikako

shiseido art egg賞、TERRADA ART AWARD寺瀬由紀賞、VOCA賞を受賞

自分にとって当たり前前のドローイングが評価され重要な表現だと気づく

描き続ける環境をつくり出そうと公募プログラムに応募を重ねた

幼い頃から絵描きになる未来しか想像したことがありませんでしたが、焦ったのは大学3年生のときです。絵を自由に描いて生きていくためにはどうしたらいいだろうと考えて、『CAF ART AWARD』や『ART IN THE OFFICE』、『shiseido art egg』といった公募プログラムに応募してみたんです。

特に得るものが大きかったのは『shiseido art egg賞』を受賞し、アートギャラリーで初めて個展を開くことができた経験です。ドローイング作品のみで展示を構成したのもそのときが初めて。一般的にはドローイングは作品制作の過程にあるもの・前段階のものという認識が強いようで、それ自体をメインの表現手段にしていることを珍しく思われたのが私にとっては驚きでした。自分の表現の中でいかにドローイングが重要なもので、今まで自然に選び取っていたものだったのか。そのことを見つめ直す機会になったと同時に、無意識や自然さを内包しながら表現を続けてい

くことが、自分に合っているのかもしれないと考えるようにもなりました。

2021年の『TERRADA ART AWARD』も同じく個展形式の発表があり、そこでは床をピンク色に染め、ペインティングやネオン管、針金作品を一堂に集めて展示しました。空間全体をひとつの絵画として見立てるような展示は私にとって新しい挑戦で、それは潤沢な制作費を提供してもらえるこのような機会だからこそ実現できたことだと思っています。

教養の授業で学んだことが今も表現に奥行きをもたらししてくれる

多摩美で学んだことでは、文化人類学や文学、心理学といった教養の授業が強く印象に残っています。深く勉強してみると、そこで得た知識や思考方法が、実技の方に影響を及ぼすことがあるのが面白いところです。

私は当初、「食べること」に興味がありました。食べてお腹がいっぱいになると思考が鈍ったり眠くなったりして、自分の意志に反して身体が変わっていくように感じる。また、食べるということは体内に外部のものを取

り込む行為で、身体が外部のもので構成されていく。食に向き合うと、そうした身体の内と外、自己と他者の曖昧さという問題を突きつけられるんです。そうした思考を表現へと発展させる過程で、私はフランスの文化人類学者、レヴィ=ストロースの神話研究などにイメージを重ねることがあります。一見して離れたところにある考え方を經由することで、表現に奥行きがもたらされる。教養の授業で学んだことが今も生きています。

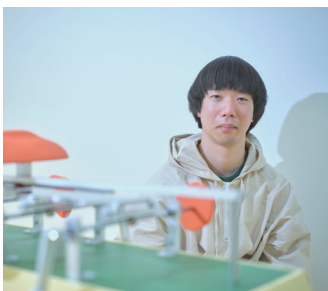
学生時代には、自分が一番生き生きできる場所を見つけてほしいです。教養の授業を受ける以外にも、その人の性格に合った過ごし方があるはず。そしてその場所で、自分が納得のいくものをつくってください。



多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻を卒業後、同大学大学院を修了。「身体」という根源的なテーマを原点到、肉体的・心理的な相互関係や、自己や他者の曖昧な関係性などを作品のモチーフとして制作。大学在学中にshiseido art egg賞(2015)、卒業後にTERRADA ART AWARD寺瀬由紀賞(21)、VOCA賞(22)を受賞。

文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品に3度選出

作品を作り続けることで得られた メディア芸術祭や個展のオファー



多摩美術大学大学院美術研究科修士課程情報デザイン領域修了。京都市立芸術大学大学院 美術研究科修士課程彫刻専攻修了。国内を中心に個展やグループ展を開催。時里充とのユニット「正直」としてもパフォーマンスを行う。第20回、第22回、第24回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品に選出。

サウンドアートの授業を受講して 出会いと制作スタイルを獲得

ももとは環境デザイン学科に入学したのですが、情報デザイン学科のサウンドアートの授業を受講した際に、「自分が学びたいのはこの分野かもしれない」と考えて転科を決め、大学院まで進学しました。ノイズ・ミュージックや現代音楽に関心があったことも、音を用いたアート作品をつくりたいと思ったきっかけのひとつでした。「音のアート作品」と聞くと「音楽」をイメージする人がほとん

どだと思いますが、私が興味を抱いた対象は、音そのものの原理です。素朴な動きをするモノとモノがぶつかって音を発するような装置を並べ、音の仕組みや構造を客観的に伝えられるような作品を制作していました。

情報デザイン学科メディア芸術コースで出会ったのが、当時助手として大学にいた時里充さんです。時里さんは、映像を通じて映像の仕組みを表現するという、私が音でやりたいと考えていたことを、映像で実践している人でした。そこから、私の関心は映像分野にも広がり、時里さんとは現在も「正直」というユニットで一緒に活動しているので、本当に貴重な出会いだったと思っています。同時に、音を鳴らす装置を制作するなかで、その装置の造形にもこだわりたいと思うようになりました。目的がありそうでない、不要性を孕んだデザインを装置に落とし込みたいと考えたのです。自分でも予想できないような要素が挿入されたデザインは、現在の制作スタイルにもつながっています。

出会いを通じ視野が広がるのが 大学でアートを学ぶことの魅力

自分にとって作品づくりは、評価を得るための手段ではなく、生きるうえで不可欠な、生活と切り離すことのできないものです。た

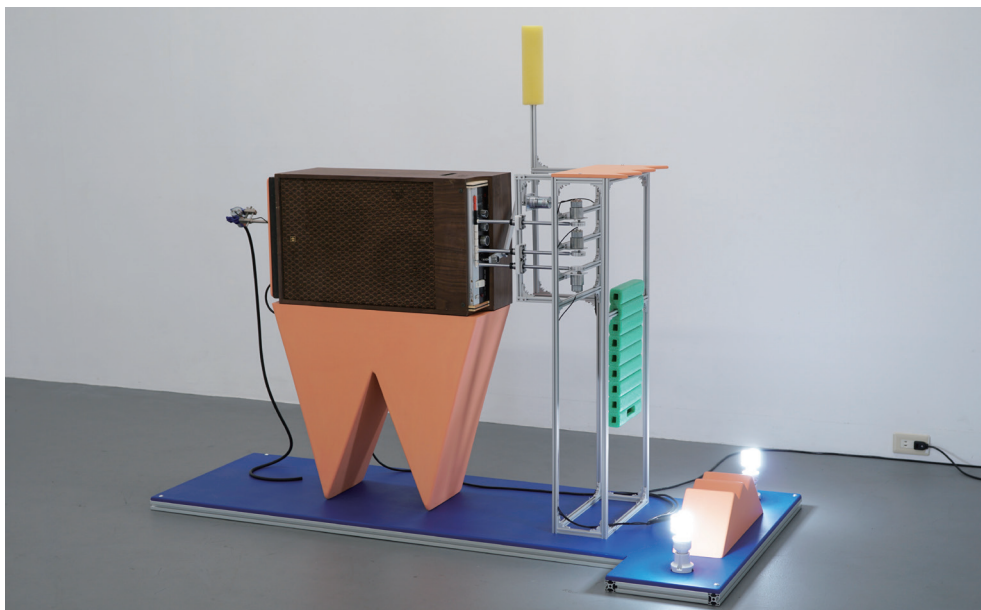
だ、続けているとありがたいことに、メディア芸術祭での推薦や個展のオファーをいただけるようになりました。なかでも、自分の作品が愛知県美術館に収蔵されたときは、大きな美術史の流れのなかに自らの存在を位置付けられたという点で非常にうれしかったです。大学でアートを学ぶことの魅力は、こうした学内外の出会いを通じ、自分の視野が広がっていくことにあると思います。多摩美ならではの人脉もありますし、同じ大学の出身ということで気にかけてくれる方もたくさんいます。

ただ、この視野の広がり、作家になった場合にしか活かせないというものではありません。アートの世界で出会うのは、他の人が理解できないようなことを突き詰めている人ばかりです。そのため、その考えの端に触れるだけでも、感性を刺激し、新しいものの見方を提示してくれます。私は、作家を続けることが美大生にとっての成功だとは思いません。そこには、続けている人なりの悩みや苦労があるからです。そして、作家として活躍することが偉いとも考えていません。大切なのは、多摩美で培った技術や感性を、人生のなかでどのように活かしていくのかということです。アートとは直接的に関わらずとも、大学で学んだものを持って社会に出ていくこと自体に、大きな意味があるのではないかと思います。

アーティスト
小林 椋
KOBAYASHI Muku
17年大学院情報デザイン修了



左上：第20回文化庁メディア芸術祭 アート部門審査委員会推薦作品「丈の低い木の丈は低い」、右上：第24回文化庁メディア芸術祭 アート部門審査委員会推薦作品「ソテツとつともなく並」、左下：小林さんの卒業制作「蚊帳をうめる」、中下：トーキョーワンダーサイト本郷(当時)で開催された企画展示「TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL Vol.9」より「ヨコとか下とか」(撮影：Kenji Takahashi)、右下：第22回文化庁メディア芸術祭 アート部門審査委員会推薦作品「ローのためのバス」



右: KeenueさんがNikeとコラボレーションしたアパレルコレクション「Tokyo Running Pack」、左上: 近年は立体作品なども手がけている、左下: 「鉄工島フェス」にて展示されたペイント作品



Nike、Facebookなど、世界的なブランドとコラボレーション

学生時代から自分から動いて 作品を見てもらえる機会をつくっていた

ラフォーレ原宿の広告に憧れ グラフィックデザイン学科に進学

高校生のころから、将来はアートディレクターになりたいと思っていました。古着を買いに原宿へ行くことが多く、いつも目に留まったのがラフォーレ原宿の広告。カッコいいヴィジュアルだな、こういう仕事を自分もやりたいなど憧れるようになり、多摩美のグラフィックデザイン学科に進学しました。

それがいざ多摩美に入ってみたら、周囲に

いるのはデザインに対する意識の高い人ばかりで、戦いたくないなーと思いました。周りの人とは違うことをしようと、怖いもの知らずに行動していました。アニメーション会社やミュージアムでアルバイトをしたり、友だちとグループ展をしたり。作品制作の楽しさや仕事になりうることを知るにつれてアーティストを志すようになり、田名網敬一先生のアシスタントには学生不可を承知で応募しました。今では考えられないような行動力ですが、採用されてアシスタントを経験できたことは、アーティストになるうえで大きな転機

になりました。

アシスタント時代、田名網先生には「アーティストなら人と違うことをしないさい」と言われました。周りにないような作品を、売ろうと思って描かなければいけないということです。先生のようなトップアーティストでも、人と違うことをしようと考え続けていることに驚かされました。具象でありながら抽象絵画のような今のスタイルを確立できたのは、この言

Keenue キーニュー

アーティスト/ペインター — 16年グラフィックデザイン卒業



1992年生まれ。神奈川県出身。2016年に多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科を卒業後、本名KANAKAの片仮名読み(ケーエーエヌエー)に由来するアーティスト名で活動を本格化。壁画制作やペインティング作品の発表、アートワーク提供など国内外問わず活動を展開する。



「GOOD PEOPLE & GOOD COFFEE」での個展の様子

Keenueさんの卒業制作



葉が響いていたからだと思います。

自ら個展を開催したことで 作品販売だけでなく壁画の仕事も

田名網先生のアシスタントを辞めて独立したのを機に、個展をするようになります。知名度も予算もなかったのが、フィーリングの合う空間に自ら持ち込みました。最初の個展はバーでしたが、反響は今一歩。コンセプトが曖昧だったと反省し、コーヒースタンドで開催した2回目の個展では、タッチを絞って私なりの世界観を打ち出そうと心がけました。大きな一枚の絵を分割するようにした展示です。アート関係の業界人が来る場所では

ない一方、カルチャー好きのお客が多いお店だったこともあり、手応えは十分。作品を販売するだけでなく、個展をきっかけにShake Shackの店舗に壁画を描く仕事をいただくなど、活動の幅が広がるターニングポイントになりました。

今では壁画制作が活動の軸のひとつになっています。昔からストリートアートが好きでし、作品が大きいことで伝わるかっこよさがある気がします。浪人時代だったか大学1、2年のころだったでしょうか。26歳ぐらいまでに「ラフォーレ原宿の“広告”をやる」という目標を紙にメモしていました。隣接するABC-MARTの店舗とのコラボレーションという限りなく近い形で実現し、感慨深いものがありました。Nikeの店舗やFacebookのオフィスなど、世界的な知名度のクライアントとのコラボレーションも少しずつ増えています。

今後は、展示や作品制作など、海外での活動をもっと増やしたいです。2月には遊びなのですがシンガポールで描いてきたりしました。ギャラリーからお話をいただくのは

ありがたいですが、フィーリングが合う空間を自分で探すほうが性に合うかもしれません。振り返ってみると、学生時代も自分から動いて、作品を見てもらえる機会を作り出そうとしていました。覚悟を決めればなんとかなるでしょうから、あのころのような行動力を取り戻したいと思っています。



ABC-MART GRAND STAGE HARAJUKUのアートワーク



Nike Store Harajukuのアートワーク

ギャラリストやキュレーターはどんなアーティストに注目するのか？

様式的な価値観を飛び越えていくラディカルさを持った 「何かを変えてくれる期待感」を持たせてくれる作家

株式会社NYAW代表取締役／キュレーター 山峰潤也

型にはまらないメディウムで 勝負している人の覚悟に惹かれる

新人アーティストを発掘する場として、私が審査員を担当するアートフェアや大学の講評会、制作展などがあります。こうした機会を通して思うのは、ある種のコミュニティに接続することで創作のモチベーションや切迫感を持ち続ける姿勢が大事だということです。特定のコミュニティに限らず、同時代的な意識を持つ競争相手や作品を見せ合える相手がいることが重要なことであり、私が注目する人の多くは、そうした状況に身を置くことで成長を続けていると感じます。

私自身は「何かを変えてくれる期待感」を持たせてくれるアーティストに惹かれるところがあります。それは様式的な価値観を飛び越えていくラ

ディカルさを持ち、メディアを問わずに表現できる人。タブロー中心のアートマーケットの中で、それ以外のメディウムで勝負することは非常にタフです。それでも型にはまらないメディアの魅力に取り憑かれ、その中で勝負している人には一定の覚悟を感じますね。

他者との対話を重ね ブレない自分であることが重要

もうひとつ、アーティストにとって重要なのが「他者との対話」「自分との対話」であり、自分の中で練ったものを表現としてきちんと外に出すことです。「他者との対話」というのは、世界中でアートが生み出してきたダイナミズムに触れることでもあります。アートは西洋を中心に発達し、アメリカの資本主義と接続して一気に巨大化しま

した。アートにはそれだけの力があり、さまざまな民族・国籍の人々が生きていく上で、必死に声を上げるためのツールにもなっています。しかし、その切実な声は日本にはなかなか届いてこない。だからこそ、世界中でアートが持つ力の底と広さを目の当たりにし、圧倒される体験をしてほしいのです。それは「アートにできること」の上限を高く持つことにもつながります。

一方、他者や世界と相対化の中で、自らの表現を喪失してしまうことがあります。そうならないために重要なのは、自分にできること・できないことを受け入れ、それをどう更新させていくか——対話を重ね、ブレない自分であることです。突き抜けていると感じるアーティストには、こうした「他者世界」と「自分自身」の均衡が取れている人が多いのだと思います。



PROFILE

キュレーターとして、これまで東京都写真美術館、金沢21世紀美術館、水戸芸術館現代美術センターに勤務したのち、ANB Tokyoのディレクターを勤める。その後、株式会社NYAWを設立し、アートに関わるコンサル、事業組成などを行うほか、展覧会やイベントの企画運営などに携わる。

造形作家 | 13年情報デザイン卒業

IKEUCHI イケウチ

第17回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門優秀賞を受賞した卒業制作

「文化庁メディア芸術祭優秀賞」受賞、「アルスエレクトロニカ」に招待

滑らかな姿勢で作品と向き合い 壁をも滑らかに乗り越えていく

クラブ棟の仲間と過ごす時間と 先生たちの後押しが世界を広げた

多摩美ではFlashコンテンツやデザインを学びながら、それ以外の大半の時間を、ゲームをしたり、漫画を読んだり、クラブ棟の仲間とすごしていました。なにかしらの一芸を持った人たちが集まり、尊敬し合えるコミュニティが形成されていたと思います。私も切磋琢磨するように、得意分野のプラモデルをつくり続けていました。プラモデルはあら

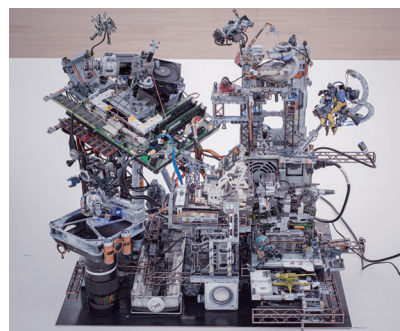
ゆるものを思いどおりに表現でき、かつエンタロピーが極めて低いので、自分にはぴったりでした。

卒業制作に発表したハイブリッド・ジオラマも、プラモデル制作の延長線上にあります。同じく身近な存在だったコンピュータの内部が秘密基地に見えるという着想から、プラモデルを組み合わせた作品です。矢野英樹先生にも「池内くんがやっていることは芸術かわからないが、限界芸術という概念もある」と背中を押され、自己満足かもしれませんが、納得できる作品を追求できたと思います。

それを褒めてくださった久保田晃弘先生の後押しもあって出展したのが、第17回文化庁メディア芸術祭です。エンターテインメント部門で優秀賞を受賞し、周囲の目が少しずつ変わっていく転換点になりました。

制作で心がける 「滑らかさ」が バレンシアガとの コラボにも発展

受賞をきっかけに「アルスエレクトロニカ」へ招待されました。ウィーンやリンツでさまざまな芸術に触れ、特に感動したのが、シェーンブルン宮殿の庭園にあるグロリエッタという建物です。本当に泣き出してしまったほどで、帰国して久保田先生にそのことを伝えると、「芸術にはそういうパワーがある」と教えてくれました。見る人の感動を呼び起こす力でも言いましょうか、今に

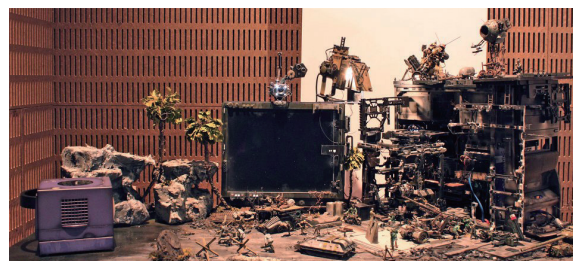


もつながる大きな学びでした。

作品にパワーを持たせるために私が大事にしているのは、「滑らかさ」です。卒業制作に迷ったときには、学生生活をそのまま反映したような作品にしましたし、造形作家を仕事にするために悩んだときには、出会いに流されるようマネージャーに就いてもらうことにしました。壁にぶつかっても滑らかに、エンタロピーの低い方向に進むことを心がけていたのです。バレンシアガとのコラボレーションなど、活動の幅が広がったのもそうした姿勢だったからのように思います。作品にもいえることで、背景の文脈の一貫性や、構図の視線誘導のスムーズさを重要視しています。文学や哲学を作品に取り込むのも滑らかな作品に仕上げるためですが、同時に博識だったクラブ棟の仲間にも認めてもらうこともどこかで意識していたのかもしれない。

私の原点はクラブ棟で仲間とすごしていた時間にあります。香水で例えるなら、濃縮した原液を抽出する工程。販売するにはそれを適度に薄めて、パッケージングして、ブランディングしないとダメです。多摩美でのモラトリウムともいえる期間は、自分の中の原液となる部分を追求できると思うので、学生の皆さんにも原液の抽出に専念してほしいですね。

2013年に多摩美術大学情報デザイン学科を卒業し、同年に第17回文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門優秀賞を受賞。既製品のプラモデルや工業製品のパーツを組み合わせた造形作品で国内外から高い評価を受け、世界最高峰のメディアアートイベント「アルスエレクトロニカ」に招待される。

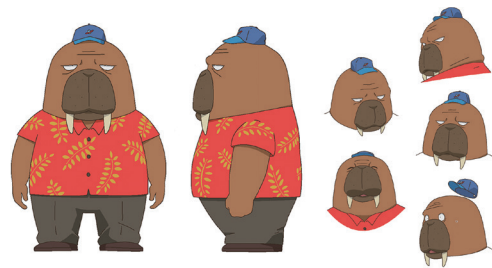


第17回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門優秀賞を受賞した卒業制作の写真



左:テレビアニメーション「オッドタクシー」のメインビジュアル、右上:「オッドタクシー」のキャラクター設定画像、右下:「オッドタクシー」のコンセプトアート ©P.I.C.S./小戸川交通パートナーズ

突き抜ける力



木下さんの卒業制作「INDOOR」

アニメーションディレクター／イラストレーター | 14年メディア芸術卒業

アニメ「オッドタクシー」で「文化庁メディア芸術祭新人賞」受賞

卒業制作で表現テーマが明確になり 「オッドタクシー」の世界観につながる

木下 麦
KINOSHITA Baku

自分の評価に固執せず

作品を人に見てもらおうことを学ぶ

情報デザイン学科メディア芸術コースでは、インスタレーションやプログラミングなどの授業を通じ、幅広い制作技法を修得しました。そのなかでも特に映像分野におもしろさを感じ、3年次以降はアニメーションの制作に力を入れるように。もともとイラストは描いていたのですが、動きが加わるアニメにおいては、カット割りやアングルによって、作品を観た人に伝わる印象が大きく変わります。その奥深さに惹かれ、世界中の名作映画などを観て勉強を重ねました。大学生活で印象に残っているのは、講評の時間です。あるとき、私はコメディ色の強いアニメ作品を用意していたのですが、自信がなかったので提出をためらっていました。しかし、勇気を出して発表してみると、意外にも周囲からの反応がよかったのです。この経験から、自分の評価に固執せず、作品を人に見てもらおうことの重要性を学びました。

卒業制作では、「インドア」という短編アニメ作品を発表。ほとんど1年間を費やして制作に打ち込みました。作品の内容は、部屋のなかに閉じこもっていた主人公が外側の世界の価値を認識し、精神的な閉鎖から脱却し

ていくというものでした。「主人公が閉鎖的な環境を打破して成長する」という自分の表現したいテーマが明確になったという意味において、「オッドタクシー」に与えた影響も大きかったと思います。また、この作品がきっかけでP.I.C.S.の仕事を手伝うようになったという点でも、キャリアにおけるターニングポイントになりました。

自分の手で長編アニメを作りたい 積極的に企画書を提出した

大学を卒業し、P.I.C.S.の手伝いを始めましたが、自分の手で長編アニメをつくりたいという思いを実現するべく、「オッドタクシー」の原型となる企画書を提出していました。ここからかなり長い年月がかかったのですが、先輩のプロデューサーやアニメ会社の方に協力していただき、監督とキャラクターデザインを担当することになりました。

初めての長編アニメ監督作品ということで苦労もありましたが、アニメが放送されると国内のみならず海外からもコメントをいただき、すべての努力が報われるようなやりがいを感じました。経験が少ないなかでテレビアニメの監督を担当したことは、自分にとってかなり高いハードルだったと思っています。しかし、そこで試行錯誤しながら逃げ出さず

に挑戦したことは、間違いなく自分自身の糧になりました。

学生の皆さんへのアドバイスとしては、20代はあっという間なので、自分のために時間を使ったほうがいいということです。大学はすごく刺激的で楽しい環境ですが、遊びすぎずに課題にもきちんと取り組むようにしてください。私がしていたように、学生のうちから現場に飛び込んで経験を積むこともおすすめです。たった一度きりの貴重な大学生活、真面目に、フルスイングで挑戦すれば、きっと大きく羽ばたくことができると思います。



多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース卒業。在籍時からイラストレーター・アニメーターとして活動。卒業後はアニメーターや監督補佐を経て、オリジナルTVアニメーション「オッドタクシー」で自身初となる監督・キャラクターデザインを担当。第25回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門新人賞を受賞。

メーカー

富士フイルム

写真フィルムで培った独自技術を進化させながら、時代を捉えた事業領域でさまざまな製品やサービスを世の中に提供する。企業風土に深く根付いた「NEVER STOP」のマインドから、ヘルスケアやマテリアルズなど、近年は事業変革でも確かな実績を残している。

インスタントカメラの「instax」など 主力製品の構想段階から関わる



デザインセンター
デザインマネージャー
酒井真之さん
(03年プロダクトデザイン卒)

富士フイルムの事業には、大きく3つの柱があります。予防・診断・治療に関わるヘルスケアに、スマートフォンやタッチパネルに使われている材料や、機能性フィルム、データストレージ用磁器テープなどを扱うマテリアルズ。そして、カメラやレンズを扱うイメージングです。デザインセンターでは3つの事業それぞれにデザインの面からアプローチしています。製品やサービスが世に出る過程の下流だけでなく、構想段階の上流から関与しているのがデザインセンターの大きな特徴です。

化粧品ブランドの「アスタリフト」、ミラーレスデジタルカメラの「Xシリーズ」、近年の大ヒット作である「instax」など、富士フイルムの主力製品の多くが多摩美の卒業生のデザインによるものです。活躍している卒業生に共通するのが、抜きん出たプレゼンテーション能力の高さ。プロダクトデザイン専攻では、学生の作品を教授が日替わりでチェックします。それゆえ学生は多角的な視点が獲得でき、美に対する柔軟性のようなものが育まれるのではないのでしょうか。造形美や機能美、所作の美など、美を知覚する総合力とそれを言語化して表現していく力を持ったデザイナーは、これからも社会で求められていくはずで



デザインセンター
チーフデザイナー
亀井敬太さん
(12年プロダクトデザイン卒)

プロダクトデザインに憧れるようになったのは、深澤直人先生がデザインした「インフォバー」がきっかけでした。画期的なデザインの携帯電話に衝撃を受け、これをデザインした人と同じ大学で学びたいと思い、多摩美のプロダクトデザイン専攻に進学しました。

多摩美の授業のなかでも、特に印象的だったのが、安次富隆先生に課された「アイデアデベロップメント」という課題です。ひとつのテーマが与えられて、学生全員でそれを議論するというもの。例えば「ハガキに1本の直線を引きなさい」というシンプルな課題に対して、約60人の学生が考えたアイデアが集まります。いかに多角的なアイデアを持ち、幅広い選択肢からどれに絞るか。これは現在の仕事にも通じます。プロダクトデザインの現場では、一案だけ出して採用されるということはまずありません。幅広くたくさんアイデアを展開し、デザイン案を絞り込んでいきます。アイデア展開とセレクションの重要性を学べたことは、学生時代の大きな財産だと思っています。

今は「instax」というインスタントカメラ<チェキ>のシリーズとデジタルカメラを主に担当しています。スマートフォン用プリンターの「instax mini Link 2」という製品では「写真をつくることを楽しむ」というコンセプトを設計するところから参加し、機能も提案してデザインに落とし込みました。AR（拡張現実）エフェクトを重ね合わせて空間に絵や文字を描く空間描画機能を搭載しただけでなく、音や振動などユーザーの五感に訴えるような機能を持たせています。

今後は自分が提案してデザインをするだけでなく、サポートすることにも挑戦したいです。後輩へのアドバイスを通してアウトプットされていくものに興味を持っています。



デザインセンター
会田侑香里さん
(19年プロダクトデザイン卒)

入社して4年目になりますが、1年目の終盤には実際に販売される製品のデザインをしていました。最初に担当したのは、亀井さんの製品のフォーマット違いにあたる「instax Link WIDE」です。ワイドサイズのチェキをプリントできる製品で、機能が決まっていない段階からアイデアを出していきました。家で使うシーンが増えることを想定し、持ち運べるストラップに加えてスタンドが付いた2wayスタイルを提案。ライティングにも遊び心を持たせて3色から選べるようにしています。形や機能に先駆けてコンセプトやターゲットを考えるとところからデザイナーが関われることに、新人ながら大きなやりがいを感じました。

2年目には超望遠ズームレンズを担当しています。レンズは光学的な設計制約を守り、デザインする必要があります。美しいバランス、絞りリングの操作性、ボタンの大きさなどを考え、予算内で質感を出すために塗料の調合にもこだわりました。自分の趣味趣向とのギャップがある製品なので、デザイナーとして製品の世界観に入り込んでいくことに苦勞しましたが、それで鍛えられたように思います。

どんな仕事にもいえるかもしれませんが、プロダクトデザインには納期が存在します。限られた時間のなかで妥協することなく、自分が納得するまで追求し続けなければいけません。それは多摩美のプロダクトデザイン専攻の授業を通して磨かれた姿勢のように思います。優秀な同期に囲まれて、課題に順位がつけられる環境下で、誰にも負けないという



強い気持ちを持って授業に参加していました。デザイナーにとって粘り強さはとても重要な素質です。多摩美で授業や課題としっかり向き合い、仲間と切磋琢磨した経験は将来に生きるはずなので、後輩の皆さんには4年間を大切にすごしてもらいたいと思います。



多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのでしょうか。また、その卒業生たちが学んだ多摩美での4年間は、ビジネスの現場でどう生かされているのでしょうか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに尋ねました。

本記事は連載企画です。
さらに詳しい内容や他
企業情報はWebでご覧
になれます。



メーカー

トヨタ自動車

2022年に新車販売台数が3年連続世界一位となった、日本を代表する自動車メーカー。代表的な商品に「クラウン」「プリウス」「ヤリス」など。世界中のお客様の笑顔と幸せのため、「未来のモビリティ社会の実現」を目指す。

コンセプトを考え、
実際にものをつくり検証し
問題解決に取り組む力が卒業生の強み



MSカンパニー MSデザイン部
第一デザイン室 1G

山本優太郎さん
(14年プロダクトデザイン卒)

車づくりの中でも、私が担当するのは内装デザインです。直近で携わったのは「プリウス」という車種。カップホルダーやトレー、スマホの充電器といった機能が集約するエリアは私が特に力を入れた部分です。また、これまでに「カローラ」や水素自動車の「MIRAI (ミライ)」のデザインにも参加しています。

車づくりは、まず「どのような世界観で、どのような価値を提案するか」という大きなコンセプトを決定するところから始まります。そして、内装担当・外装担当に分かれた6~7名のデザイナーがそれを具体化します。描いたデザインを立体に起こしてからは、設計者の視点も取り入れながら何度も作り直し、仕様や使い勝手を詰めていくというのが大まかな流れです。内装デザインの特徴は、ものを置いたり操作をしたり、人の動作に関わる部分が多いところにあります。だから、実際に運転席に座って初めて「どの高さにどの機能があるか使いやすいか」がわかる。これが難しくもありおもしろいところだと思っています。「カッコいいけれど使いづらいデザインではないか?」「お客さまのためのデザインか?」を常に自問自答し、使いやすさとデザインのバランスを考えていく必要があるのです。

企業で働くデザイナーにとって、コンセプトを考え、それをきちんとアウトプットする力がいかに重要かを日々実感しています。ものづくりはデザイナーだけでは完結しません。設計者や企画担当者と一緒に仕事をする上では、「なぜその形か?」という質問に論理的に答えられないといけません。「カッコいいから」だけではアイデアとして弱いのです。その点、コンセプトを考え、実際にものをつくり検証しながら問題解決に取り組むことができた多摩美での学びは大いに役立っています。

また、私が以前サレジオ工業高等専門学校に通っていたときの話ですが、当時インターンシップ先の企業で多摩美の学生と一緒に活動する機会がありました。私が3年次編入で多摩美を受験したのは、そこで多摩美生たちのプレゼン能力の高さやアウトプットとコンセプトがしっかりつながった考え方に衝撃を受けたことがきっかけです。こうしたコンセプトの考え方と感性を、バランスよくトレーニングできる場があるのが多摩美の優れた点ではないでしょうか。トヨタには多摩美の卒業生が多く働いていますが、感性的でありながら論理的にも筋が通ったデザインが得意な人が多いと感じます。



公務員・団体職員

神戸市役所

兵庫県の県庁所在地・神戸市の行政機関。明治の開港以来、新しい気風や多彩な文化を取り入れながら独自のブランドを確立し、国際都市として発展を遂げてきた神戸において、都心や拠点駅周辺の再整備や里山の再生など、バランスのとれたまちづくりを進めている。

企画、広報、まちづくり…
大学で身に付けた力を活かせる
公務員という選択肢



人事委員会事務局任用課
担当

栗田峻平さん

人事委員会事務局任用課
係長

三原涼太さん

神戸市では、2019年度より「デザイン・クリエイティブ枠」という新たな採用枠を設置しました。これは、従来の公務員像にとらわれない多様な人材を集め、新しいまちづくりを実現するための取り組みです。

この採用枠は、デザイン・美術・音楽・映像などの素養があり、培った思考などを活かして、創造的に仕事を企画・実現できる人を求めています。採用後は総合事務職として働くこととなりますが、最初の配属が企画立案や広報、まちづくりなど、大学で学んだ素養を活かしやすい部署となる点の特徴です。多摩美の卒業生を含め、「デザイン・クリエイティブ枠」で採用した職員には、芸術分野で培った強みを発揮し、チームの一員として神戸市の活性化に貢献してもらいたいことを期待しています。



神戸市環境局環境創造課

津賀恵さん

(18年大学院彫刻修了)

神戸市環境局の環境創造課に所属しています。職場のチームの主な仕事は、地域や企業のエネルギー対策を促進し、脱炭素の取り組みと市民の人々をつなぐことです。

私は、芸術分野の知識や技術には多くの人々の生活を豊かにできる可能性があると考えていました。そんななか、神戸市で新設された「デザイン・クリエイティブ枠」のビジョンに共感し、応募を決めました。

働くなかで知ったのは、チームで仕事をする魅力です。大学での創作活動は、基本的に個人プレーの世界でした。しかし、チームで働くことの多い現在の職場では、さまざまなバックグラウンドを持つメンバーと協力し、ひとつのものをつくっていくおもしろさがあります。

大学の講評では、他の人の作品に対し自分なりに考えることが求められました。入庁前はほとんど知識のなかったエネルギー分野の仕事に関わるなかでも、楽しみながら働くことができているのは、そのような経験が糧になっているようにも思います。公務員という進路を考えている人は少ないと思います。しかし、大学内で多くの情報を集めることによって、幅広い将来の選択肢を持ってほしいと思います。



FACE 2023で 学生・卒業生が多数入賞

新進作家の登竜門として知られる「FACE 2023」にて日本画・中嶋弘樹助手が優秀賞を受賞しました。また、12年油画卒業・橋口元さんが読売新聞社賞、16年大学院版画修了・霧生まどかさんと同2年・宮内柚さんが審査員特別賞を受賞したほか、13名の学生・卒業生が入選しています。これはSOMPO美術財団と読売新聞社が主催する現代絵画のコンクールで、今回で11回目を数えます。「年齢・所属を問わず、真に力がある作品」を公募し、1,064名の応募の中から、将来国際的にも通用する可能性を秘めた作品が審査によって選ばれました。受賞・入選作品は、2月18日から3月12日までSOMPO美術館にて開催された「FACE展 2023」で展示されました。また、グランプリと優秀賞の受賞作家4名は、3年ごとに行われるグループ展「絵画のゆくえ」に出品し、受賞後の展開を発表する機会が得られます。



中嶋弘樹「リビングルーム」

建築デザインの学生コンペで 環境デザイン4年森田靖之さんが最優秀賞

日本ペイントグループが主催する国際学生コンペティション「アジア・ヤング・デザイナー・アワーズ 2022」で、環境デザイン4年・森田靖之さんが最優秀賞を受賞しました。本コンペは多様な人々が豊かに自分らしく暮らす社会の実現を、建築・デザインの視点からどのようにアプローチできるか考えるもので、アジア各国の学生が国をまたいで同じテーマに取り組み、それぞれの国で選ばれた最優秀者はアジア学生サミットに参加します。「空間のイマジナリーライン」をテーマとした今回、森田さんは「無計画空間」を提案。地球上のあらゆる場所を対象として1



森田靖之「無計画空間」

マス1,000㎡のグリッドを引き、既存の環境とグリッドの間に来た形態をスラブによって区切ること、内装空間を創出するものです。都市や自然の場を読み替える大胆な試みに審査員全員の評価が一致しました。

卒業生の西隆介さんが 日本タイポグラフィ年鑑グランプリを受賞

03年グラフィックデザイン卒業・西隆介さんが手がけた「大阪中之島美術館 VI計画」が「日本タイポグラフィ年鑑2023」でグランプリを受賞しました。また、88年デザイン科卒業・栗辻美早さんがパッケージ部門と環境・ディスプレイ・サイン部門、10年大学院博士後期修了・藤隆弘さんが環境・ディスプレイ・サイン部門、グラフィックデザイン3年・藤田蓮さんが学生部門でそれぞれベストワーク賞を受賞しました。本年鑑は特定非営利活動法人日本タイポグラフィ協会が毎年発行しているもので、掲載作品は国内外から一般公募されており、海外でも評価の高い記録誌となっています。



大阪中之島
美術館
NAKANOSHIMA
MUSEUM OF ART.
OSAKA

西隆介「大阪中之島美術館 VI計画」(シンボルマーク、ロゴタイプ)

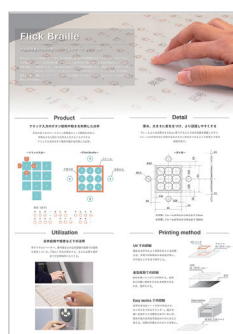
CAF賞2022で 修了生の花形槿さんが優秀賞

学生対象アートコンペ「CAF賞2022」で22年大学院情報デザイン修了・花形槿さんが優秀賞を、メディア芸術2年・SHU BROWNさんが岩淵貞哉審査員賞を受賞しました。これは公益財団法人現代芸術振興財団が学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興を目的に開催しているコンペティションです。2022年11月29日から12月4日、ヒルサイドフォーラムにて入選作品の展覧会が行われ、会期中の最終審査にて各賞が選出されました。花形さんは視覚情報を足先から得る状態で過ごすパフォーマンス作品を発表。「非常にユニークで興味深い作品」と評価されました。



花形槿「still human」撮影：木奥恵三

グッドデザイン・ニューホープ賞で 学生・卒業生が多数入賞



武輪幸之介「Flick Braille」

これからの時代を担うデザイナーの発掘を目指し、公益財団法人日本デザイン振興会が新設した「2022年度グッドデザイン・ニューホープ賞」で、22年プロダクトデザイン卒業・武輪幸之介さんが「物のデザイン」カテゴリーで優秀賞を受賞、10名の学生と卒業生が入選しました。武輪さんは中途失明者のためのコミュニケーションツールとして、フリック入力ルールを応用した新たな点字を提案。「システムデザインの完成度が非常に高く、社会実装の可能性も高い」と評価されました。

みなとみらいにアートテーブルが出現 学生グループが審査員賞を受賞

横浜・みなとみらい地区の歩行者空間にテーブルを置き、集い楽しもうというBankART1929主催のアートプロジェクト「キング軸・アートテーブル」のデザインアイデア募集で、環境デザイン1年・奥川司さんと同2年・河野七穂さんが参加するグループが木村絵理子審査員賞を受賞しました。受賞したtreの作品は実際に制作され、2022年10月から11月、高島中央公園ほか2カ所で展示されました。



tre「わになる」©BankART1929 撮影：中川達彦

岡崎智弘非常勤講師が 亀倉雄策賞を受賞

公益社団法人日本グラフィックデザイン協会（略称JAGDA）が発刊する年鑑『Graphic Design in Japan 2023』の掲載作品選考会にて、情報デザイン・岡崎智弘非常勤講師が「第25回亀倉雄策賞」を受賞しました。また、グラフィックデザイン・服部一成教授、同・葛西薫客員教授、統合デザイン・永井一史教授、06年グラフィックデザイン卒業・窪田新さん、11年同卒業・松永美春さんがJAGDA賞を受賞しました。



岡崎智弘 放送局の番組コンテンツ映像「デザインあ neo あのテーマ」（日本放送協会）

金子勲矩助手のアニメーション パリの国際映画祭でも受賞

グラフィックデザイン・金子勲矩助手のアニメーション作品「Magnified City」が第15回パリ国際アニメーション映画祭で批評家賞と観客賞を同時受賞しました。本作品はイタリア、オーストリアの映画祭で最優秀アニメーション賞を受賞し、DigiCon6 ASIA Awardsでも最高賞を受賞したほか、国内外の数々のアワードで入選、上映されています。



金子勲矩「Magnified City」

野田秀樹教授が ISPA2023優秀アーティスト賞

演劇舞踊デザイン・野田秀樹教授が、ISPA（国際舞台芸術協会：International Society for the Performing Arts）において、「Distinguished Artist Award」を日本人として初受賞しました。同賞は、各国の舞台芸術専門家のネットワーク構築を目的として設立されたISPAにより、舞台芸術界において、その才能、芸術性、献身をもって貢献を果たしたアーティスト



野田秀樹教授

に贈られます。授賞式は1月12日にアメリカ・ニューヨークで行われました。

建畠哲学長が 京都市文化功労者表彰に選出

令和4（2022）年度京都市文化功労者表彰に建畠哲学長が選出されました。永年にわたり同市の学術・芸術などの文化の向上に多大な功労があった方々を表彰するものです。京都はもとより日本の現代美術界の発展や後進の育成に尽力するとともに、詩人としても活動している建畠学長は、『零度の犬』で高見順賞、『死語のレッスン』で萩原朔太郎賞を受賞しています。このたび、学術（美術）、文学（詩）



建畠哲学長

の分野での功績が認められての表彰です。表彰式は2022年12月23日、京都市役所本庁舎にて行われました。

金井勇一郎教授が 文化庁長官表彰に選出

演劇舞踊デザイン・金井勇一郎教授が歌舞伎舞台美術と大道具製作を通して文化財保護に貢献したとして、令和4（2022）年度文化庁長官表彰に選出されました。また85年日本画卒業・半田昌規さんも文化財修理の功績により選ばれています。表彰式は2022年12月14日に都内で行われました。金井教授はプロダクションマネージャーと舞台装置制作を担当した舞台作品「ハリポッターと呪いの子」が「第30回



金井勇一郎教授

読売演劇大賞」で選考委員特別賞も受賞しています。

吉村純一教授が携わる建築物が 国土交通大臣賞を受賞

環境デザイン・吉村純一教授（株式会社ブレイスメディア・パートナー）が設計に携わった「早稲田アリーナ（早稲田大学37号館）」が、「第1回SDGs建築賞（旧サステナブル建築賞）」の大規模建築部門で国土交通大臣賞を受賞しました。これは優れた作品であるとともに、計画から運用、廃棄にいたる全ての段階におけるSDGs達成に向けた顕著な取り組みで、普及効果が期待される建築物を顕彰する賞です。全体を半分地下に埋め地中熱で省エネルギーを実現し、屋上部分を緑化して豊かな外部空間を創出する



早稲田アリーナ

早稲田アリーナは、数々の賞を受賞しています。

日本パッケージデザイン学生賞 学生が銅賞を受賞

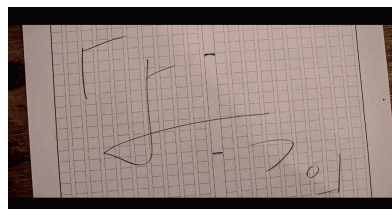
「日本パッケージデザイン学生賞2022」でグラフィックデザイン3年・安藤晴南さんが銅賞を受賞しました。また同4年・中西英里奈さんが審査員特別賞（小玉文賞）を、同3年・馬場隆斗さんが審査員特別賞（渡辺有史賞）を受賞しました。これは公益社団法人日本パッケージデザイン協会（JPDA）が新設したアワードで、初年度の今回、「つなぐ-Connect-」をテーマに作品募集を行い、300点を超える応募がありました。入賞作品は『年鑑日本のパッケージデザイン2023』に収録予定です。



安藤晴南「本から文字が溢れ出る体験でつなぐパッケージ」

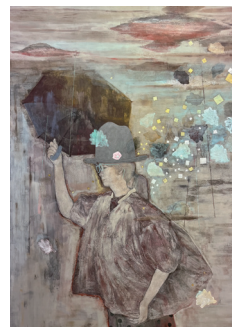
学生の短編映画祭で 大久保帆夏さんが最優秀賞

「第5回フェローズフィルムフェスティバル」学生部門でメディア芸術1年・大久保帆夏さんが最優秀賞を受賞しました。これはクリエイターの人材紹介を行う株式会社フェローズが主催する国内の学生を対象とした短編映画祭で、4分間のショートフィルムを募集するコンペティションです。1月29日、一次審査を通過した8作品が渋谷ユーロライブにて上映され、同日各賞も発表。大久保さんの作品はBSデジタル放送のテレビ番組にて全国放送されました。



大久保帆夏「よっ。」

修了生の能島浜江さんが 日展で東京都知事賞を受賞



能島浜江「雨ニモ…」

「第9回日展」で、94年大学院日本画修了・能島浜江さんの作品「雨ニモ…」が第1科日本画にて東京都知事賞を受賞しました。日展は今回115年目を迎える日本最大級の公募展です。能島さんの作品は「着想のモダンさに顔料の厚みの表現性が強調され、

日本画の可能性を照らす作品と言ってよい。雨の直線と箔押し装飾も効果もあがっている。濡れることをいとわない澀刺とした心情、新しい世界を創りたいという気概にあふれている」と評価されました。

大東建託との産学共同研究成果を発表 「次世代の賃貸住宅のプロトタイプ開発」



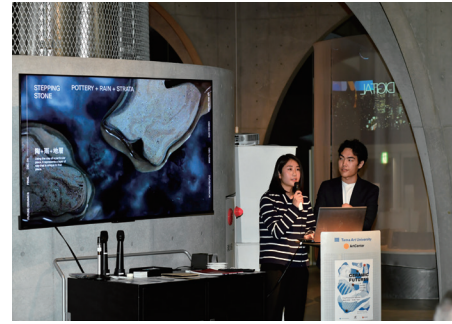
小林克満代表取締役社長（写真左）と意見交換

2022年11月4日、大東建託株式会社との産学共同研究最終成果発表会が、同社の賃貸住宅未来展示場・ROOFLAG（ルーフラッグ）で行われました。本研究は同社創業50周年の記念商品となる「次世代の賃貸住宅

のプロトタイプ」を開発するプロジェクトです。「人の内面を感じ取る力、視覚的なコミュニケーション能力を備える美大生の視点を通して、住み手の目線から次世代の価値観の先取りを目指したい」とのオファーを受け6月に始動。グラフィックデザイン学科、プロダクトデザイン専攻、環境デザイン学科、芸術学科の学生35名が4チームを編成し、約5ヵ月にわたり取り組んできた研究成果を発表しました。今後は同社にてコンペティションへの特別参加や商品化の検討がなされるほか、最終成果発表展をアートテークギャラリーで開催予定です。

アートセンターと 陶芸×デジタル技術の融合を探究

2022年12月8日・9日、八王子図書館アーケードギャラリーにて、アメリカの協定校であるアートセンター・カレッジ・オブ・デザインとの国際協働教育プロジェクト「Pacific Rim（パシフィック・リム）」の成果発表展を開催しました。3年ぶりに対面での実施が叶った今回は「セラミックの未来：デジタルかつ持続可能なセラミックをデザイン」をテーマに、伝統的な陶芸技術と新しいデジタル技術の融合について研究しました。来日した11名の学生とともに、9月から愛知、岐阜、京都、佐賀をめぐる2週間のリサーチトリップにて窯業地で受け継がれる技術を実際



会期中8日に行われたプレゼンテーションの様子

に体験し、東京では企業やアーティストによる特別講義も受けながら、3Dプリンターを活用し両校の学生の混成グループで作品づくりに取り組みました。

統合デザインの学生が マクドナルドのトレイマットをデザイン

統合デザイン・永井一史教授のゼミに所属する3年生がデザインしたトレイマットが、2022年12月16日から22日まで世田谷区内のマクドナルド全店舗で使用されました。これは利用客に気候変動を意識した行動を促すことを目指して、日本マクドナルド株式会社、世田谷区とともに取り組んだプロジェクトです。10月から11月にかけて行われたオンライン投票では2,000以上の票が集まり、実際に使用されるデザインとして最優秀賞に統合デザイン3年・宮内暖笑さん、優秀賞に同・有田美聖さん、杉浦孝太郎さんが選出されました。また特別賞として世田谷区環境政策部長賞に同・中島仁菜さんが選ばれました。



最優秀賞に選ばれた宮内暖笑さんのデザイン

サービスデザインの開発ツール 「Business Origami®」をTUBにて販売開始

サービスデザインの創造的な開発ツールとして世界的に認知されている「Business Origami®」を、TUBにて2022年12月12日より販売しています。これは株式会社日立製作所研究開発グループが開発したもので、さまざまな立場のメンバーが視覚的にイメージを共有し創造的なディスカッションを行うことで、新しいサービスの全体像をデザインするためのメソッドです。本学の教育現場でも活用し、学習方法を模索してきた「Business Origami®」を販売することで、サービスデザイン教育プログラムの本質的な理解とさらなる普及を目指します。



販売記念トークイベント「関係を生み出すデザイン—Business Origami®の可能性」の動画はこちらからご覧いただけます

* Business Origami®は、株式会社日立製作所の登録商標です。

* 製造は、福永紙工株式会社です。

「すてるデザイン」の中間成果作品展を GOOD DESIGN Marunouchiにて開催

1月20日から30日、GOOD DESIGN Marunouchiにて、企画展「すてるデザイン〜ゴミを価値に変える100のアイデア」を開催しました。「すてるデザイン」とは、循環型社会に向け2021年度より複数企業と取り組んでいるTUBの共創プロジェクトです。循環型へ移行するためのステップとして、廃棄する前にもう一度使う社会のアクションを増やすことを目指し、さまざまな再資源化の試みを紹介する中間成果を展示しました。



「すてるデザイン〜ゴミを価値に変える100のアイデア」展示の様子

日本郵船と ユニフォームデザインコンテストを開催



田野倉凜「IBUKURO UNIFORM」

日本郵船株式会社が本学の学生を対象に募った「船員ユニフォームデザイン画コンテスト」でプロダクトデザイン4年・田野倉凜さんがグランプリ、劇場美術デザイン3年・本郷真衣さんほか1名が優秀賞を受賞しました。本コンテストは「物流に求められる新しい価値・判断基準が社会に浸透する仕組みづくり（感動物流）」の一環として、同社の人材育成組織であるNYKデジタルアカデミーが企画したものです。2023年度からは同社との産学共同研究が開始される予定です。

アートアーカイブシンポジウムで 美術評論家・東野芳明を再考

2022年12月3日、第5回多摩美術大学アートアーカイブシンポジウム「東野芳明再考 TONO Renaissance」をレクチャーホールおよびオンラインで開催しました。第1部では、アートアーカイブセンター所蔵資料のうち4つの資料体を紹介しながら、本年度の活動成果を発表。第2部は本学教授を務めた故東野芳明の業績を振り返るべく、学内外の研究者による研究発表と、「芸術学科草創期の東野芳明」について鼎談を行いました。



第2部鼎談の様子



シンポジウムの動画はこちらからご覧いただけます

起業や新事業創出に挑戦する 人材育成で最高評価を獲得

文部科学省が推進する次世代アントレプレナー育成事業（EDGE-NEXT：Exploration and Development of Global Entrepreneurship for NEXT generation）の終了評価において、早稲田大学を主幹機関とし、本学が協働機関として参画した「EDGE-NEXT 人材育成のための共創エコシステムの形成」が、最高のS評価を受けました。次の事業でも協力校として参画しています。



早稲田×多摩美「起業家育成」連携講座の様子

李禹煥×建島哲 対談講座を 生涯学習プログラムで開講

2022年12月4日、生涯学習センターのプログラムとして、建島哲学長と李禹煥名誉教授の対談講座「出会いを求めて」を国際・デザイン・リエゾンセンターにて開講しました。講座では建島学長が聞き手となり、李教授がこれまでに手がけてきた数々の作品や展覧会について、制作当時の背景や意図などを伺いました。本講座は3月末までオンラインでも配信されました。



会場での講座の様子

ウクライナの支援学生が プレゼンテーション

本学は戦禍のウクライナで厳しい状況にある芸術を志す学生を支援するため、研究・制作環境を提供するプログラムを行っています。1月13日、受入中であるプロダクトデザイン専攻所属のアリサ・チェンさんと環境デザイン学科所属のボーダン・セレディアクさんが、母国ウクライナや日本での生活についてのプレゼンテーションを国際交流センターで行いました。発表後は参加した学生から多くの質問が寄せられ、互いの理解を深める良い機会となりました。



アリサ・チェンさんのプレゼンテーションの様子

テキスタイルデザイン専攻で ファッションショーを実施

2022年11月17日、メディアホールにてテキスタイルデザイン専攻STUDIO 2の3・4年合同ウォーキングプレゼンテーションを行いました。STUDIO2は「身体」に関わるテキスタイルデザインを専門領域としており、人の動きが加わるウォーキングプレゼンテーションは、3年生の課題の一環として2019年から毎年行われています。今年は4年生の卒業制作と連携し規模を拡大して実施。事前抽選制で全学科の学生にも公開されました。



3年生のウォーキングプレゼンテーション（フィナーレ）の様子

世田谷区と統合デザイン学科が 投票率向上に取り組む

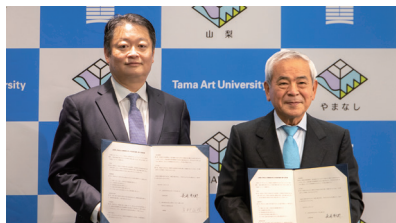
統合デザイン・永井一史教授のもとで学ぶ3年生が、世田谷区選挙管理委員会とともに「若者の投票率向上プロジェクト」に取り組んでいます。これは20代の投票率が低いという世田谷区の課題に対し、若者の立場から「視覚的な啓発」を行う連携事業として実施するものです。4月に行われる区議会議員・区長選挙に向けて、若年層や次世代有権者に向けた啓発、選挙マスコットのアップデートなど、授業で提案したさまざまな施策が実際に行われる予定です。



グループワークの様子

山梨県と 包括連携協定を締結

本学と山梨県は、同県のデザインリテラシー豊富な人材の育成と、さまざまな社会課題の解決や新たな価値の創出による豊かな「まちづくり」ものづくりに連携して取り組んでいくことを目的に、2022年12月21日に包括連携協定を締結しました。デザインをキーワードに連携を協議してきた同県と、今後はこの協定をベースに本学の持つデザイン教育の考え方やリソースを広く社会に展開・還元していく予定です。



左：長崎幸太郎山梨県知事 右：青柳正規理事長

学長の交代について

学校法人多摩美術大学は1月25日開催の理事会において、建島哲・多摩美術大学学長の2022年度末での任期満了に伴い、右のとおり新学長を選任しましたのでお知らせいたします。

第11代学長

ないとうひろし
内藤 廣

（学長任期：2023年4月1日～2027年3月31日）

内藤廣第11代学長



人事異動

新規採用

- キャンパス設計室
江川竜平 常勤嘱託
(2022年12月1日付)
- 大学戦略室大学史担当
恋川智子 常勤嘱託
(2023年1月16日付)
- 総務部人事課
伊藤菜穂 総合職
(2023年3月1日付)

退職

- 教務部教務課
東山佳代 総合職
- 大学戦略室大学史担当
山腰亮介 常勤嘱託
- 生涯学習センター事務部
仲村乃里子 常勤嘱託
(以上、2022年12月31日付)

- 美術学部
尾中彩美(グラフィックデザイン助手)
(2023年1月16日付)
- 木村かのう(リベラルアーツセンター副手)
(2023年1月31日付)
- 附属アートアーカイブセンター事務室
塚田優 常勤嘱託
(2023年2月28日付)

多摩美術大学 TUB



「まじわる・うみだす・ひらく」をコンセプトに、オープンインベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー5F (東京ミッドタウン・デザインハブ内) | 11:00~18:00 | 日曜・月曜・祝日休館 | 入場無料

4月下旬より随時開催

Tama Design University 2



多摩美術大学TUBでは、デザインのヴァーチャル大学「Tama Design University」を2021年に開催しました。今回はその第2弾として「サーキュラー」にテーマをフォーカスしたシリーズを開催します。さまざまなサーキュラーにまつわる課題にデザインで取り組む、学内外の講師をお招きして全15回の講義を会場受講（要予約先着10名）とYoutube Live 配信にて開催します。

＞ 詳細・申込方法はTUBウェブサイトをご確認ください

多摩美術大学 アートアーカイヴセンター



本学に蓄積されてきた芸術資源を保存、管理、公開していく研究教育拠点として、2018年4月に設立しました。現在17の資料体を有し、授業での利用や、学生のみなさんの制作や研究に役立てる生きた教材とするため、各種資料を整理してアーカイヴを構築しながら公開しています。アートアーカイヴセンターウェブサイトにて利用方法や動画などのコンテンツをご覧ください。

4/3 (月) - 5/13 (土)

多摩美術大学アートアーカイヴセンター 所蔵資料展1

和田誠アーカイヴ「和田誠の世界I」

和田誠 (1936-2019) は、1959年に本学図案科 (現グラフィックデザイン学科) を卒業し、イラストレーター、グラフィックデザイナー、映画監督など幅広く活躍しました。2020年にご寄贈いただいた、和田誠の全てともいえる約5万点のアーカイヴから、入学と進級を祝い、ここでしか見られない資料と作品を展示・紹介します。4/10 (月) から14日 (金) の間、各日2回「AAC資料展ガイドツアー」を開催します。最新情報はAACウェブサイトをご確認ください。会場=アートテーク2F 竹尾ポスターコレクションギャラリー 10:00~17:00 | 日曜・5/2 (火)~6 (土) 休場 | 入場無料

アートテークギャラリー



八王子キャンパス内 | ギャラリー開場時間10:00~17:00 (展覧会による) | 日曜・授業日以外の祝日休場 | 入場無料
＞ 最新情報は大学HPをご確認ください

4/5 (水) - 22 (土)

次世代の賃貸住宅のプロトタイプ

4/5 (水) - 15 (土)

PBLII-63 食を軸としたコミュニティデザインの提案

5/1 (月) - 5/22 (月)

八木幾朗退職記念展「戦争と人間」

5/27 (土) - 30 (火)

屋台トーク デザインの、マルチステークホルダーダイアログ

6/6 (火) - 19 (月)

木嶋正吾・退職記念展「零度から」

6/7 (水) - 14 (水)

「モンゴル—文様の帝国—」

キャンパス内に 世界堂がオープン



八王子キャンパス内に画材店の世界堂が2022年12月14日にオープンしました。食堂のあるグリーンホールとTAUホールの間に新築された建物1棟全てが店舗で、画材の品揃えは世界堂新宿本店に匹敵します。また9月5日にオープンした上野毛キャンパスの世界堂は、新年度より新教室棟 (Cube) にて営業します。

EXHIBITION & THEATER

2022/12/3 (土) - 2023/4/9 (日)

世田谷美術館

ミュージアム コレクションIII

それぞれのふたり 萩原朔美と榎本了彦
萩原朔美 名誉教授

1/28 (土) - 5/7 (日)

横尾忠則現代美術館

横尾忠則展 満腹腹満腹

大学院・横尾忠則 客員教授

4/19 (水) - 9/24 (日)

森美術館

ワールド・クラスルーム:

現代アートの国語・算数・理科・社会
李禹煥 名誉教授

BOOK



李禹煥 全版画

1970-2022

李禹煥 著

(名誉教授)

阿部出版

2022年12月16日刊

6,600円 (税込)



あなたの牛を

追いなさい

折野俊明 共著

(環境デザイン教授)

毎日新聞出版

1月19日刊

1,650円 (税込)



CATHOLICA

カトリック表象大全

金沢百枝

日本語版監修

(芸術学教授)

東京書籍

2月19日刊

4,180円 (税込)



快速マスター

イタリア語

[新装版]

松浦弘明 著

(リベラルアーツ

センター教授)

語研

3月10日刊

2,640円 (税込)

お知らせ

多摩美術大学美術館は移設のため、3月31日をもって現所在地での事業活動を終了いたします。また、アキバタマビ21は3331 Arts Chiyodaの閉館に伴い、第103回展の終了をもって展覧会を休止し、移設準備中です。いずれも移設後の詳細が決まり次第、大学HPなどでお知らせいたします。

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。

＞ メール (news@tamabi.ac.jp) あるいは右のQRコード「Activity News 情報投稿フォーム」からお知らせ下さい。



Tama Art University

多摩美術大学 広報誌「TAMABI NEWS」2023年3月27日発行 第31巻 第4号 通巻93号
発行: 多摩美術大学 広報部広報課 東京都八王子市鐘水2-1723 電話: 042-676-8611 (代表)

